

農作物の生育状況、今後の見通しと対策（9月）

作物名			生育状況	今後の見通しと対策
作物	水稲		・ 極早生品種や早期作型の稲刈りが進みつつあるが、7月に高温で降雨が少ない状況が続いたため、渇水による生育への影響が見られたほ場もあり、玄米品質が著しく低下している様子。 ・ 出穂が比較的遅い星空舞及びきぬむすめは、出穂前後の降雨によって生育は概ね回復した様子であるが、収穫が近いコシヒカリのほ場では、一時的な夕立による強い雨の影響で倒伏が発生しつづあり、収穫作業が遅れ気味である。 ・ イネカメムシを含めた斑点米カメムシによる被害が想定より少なく、収量も平年並～やや良とする地域もあり、作柄は悪くない様子。一方で、共乾施設の荷受け状況では、白濁未熟の発生が多い状況が聞かれる。 ・ 紋枯病やゴマ葉枯病が散見され、内稃褐変等によって穂の外観不良や着色米が見られるほ場もある。	・ 早期に落水すると玄米の品質が低下することから、収穫5日前までは完全落水しない。 ・ 適期に刈り取る。
			・ 8月の降雨以降、干ばつで停滞した生育が回復する傾向が見られ、現時点で風水害による影響はなく、葉焼病の発生は少ない傾向である。 ・ 一部でハスモンヨトウの初期食害による白変葉が見られ、増加する傾向にあるが、極端な被害は見られない。 ・ 高温や干ばつによって、栄養成長が遅れ、着莢、莢伸長及び肥大が例年より遅れているほ場が見られ、着莢の不足と併せて、生殖成長のムラによる落葉不斉一が懸念される。	・ 台風や秋雨に備えて、排水対策を継続して実施する。 ・ カメムシ及び紫斑病等を対象にした病害虫防除を励行する。播種が遅い場合は、慣行の6月播種と比較して、防除適期の開花揃後日数が異なる可能性があるので、着莢状況等の生育進展に留意する。 ・ ハスモンヨトウの発生は、地域間差、ほ場間差が大きいため、各ほ場の発生状況をよく観察し、白変葉が多い場合は防除を行う。防除の目安は、1 a 当たりの白変か所数5か所以上とする。
果樹	ナシ		・ 梅雨明けが早くに高温干ばつが続いたことから、かん水ができない園、ハダニ類が多発した園等では果実の太りが鈍った。 ・ 「新甘泉」の出荷は終了。 ・ 昨年並の高単価での販売になったが、果実の階級（大きさ）は、28玉（3L）や32玉（2L）の割合が高く、昨年よりも一階級程度小玉だった。小玉果への対応として、今年産は44玉（S）まで販売した（例年は36玉（L）まで）。 ・ 「二十世紀」の出荷はほぼ終了。 ・ 面積減等から前年よりも数量はやや少ないが、昨年並の高単価で販売されている。果実の階級（大きさ）は、「新甘泉」のように一階級程度低くなるといった小玉ではないが、小玉果の出荷も多かった。「二十世紀」においても小玉果の対応として、44玉（S）まで販売した（例年は40玉（M）まで）。	・ 収穫が終わったナシ園では速やかに礼肥を行う。 ・ ハダニ類が多発した園では、収穫後も園内を観察して防除を行う。 ・ 晩生梨の「新興」、「王秋」、「あたご」等の出荷が残っており、台風が襲来する場合には、落果防止剤の散布、結果枝の棚線への結び直し、中柱による補強等の事前対策を実施する。
			・ 9月11日の果実発育調査結果は次のとおり。 「輝太郎」：3園の長径平均が81.1mmであり、前年比99％（1日遅い）・平年比100％（1日遅い） 「西条」：3園の長径平均が52.6mmであり、前年比96％（9日遅い）・平年比94％（11日遅い） 「富有」：3園の長径平均が69.8mmであり、前年比99％（7日遅い）・平年比99％（5日遅い） ※肥大の遅れであり収穫時期の遅れではない ・ 梅雨明け以降に猛暑が続き、直射日光が当たった果実が日焼けしている（厳しい日焼けは収穫時に黒変する）。昨年大量発生したカメムシは現時点は少ない。	・ 台風が襲来する場合には、落果へ備えて突き上げ柱の設置や棚線への枝の結び直し等の事前対策を実施する。 ・ 9月に入っても高温が続き、着色遅れに伴う出荷時期の遅れが心配されることから、反射マルチの敷設、葉摘みにより着色促進を図る。なお、反射マルチは、最高気温が30℃を下回る頃から行う。 ・ 収穫前に雨が多い場合、汚損果の発生が多くなる。除草を行って園内の風通しを良くする。。 ・ 園内へのカメムシの飛来状況を確認して防除を行う。また、炭疽病の発生園では被害果の持ち出しや防除を徹底する。
			・ 「シャインマスカット」の出荷は8月28日から始まり、出荷の最盛期になっている。糖度は高めであるが、猛暑による日焼け、縮果症が発生している。	・ 土壌改良による秋根の更新は、9月下旬頃から地温が15℃以上ある10月中旬頃までに行う。収穫後防除を丁寧に行って、病害虫の越冬密度を減らす。
	白ねぎ		・ 【春ねぎ】 ・ 3～4月頃は高温干ばつにより生育は停滞していたが、気温（夜温）の低下と降雨により回復傾向にある。また、高温・干ばつにより定植時期を遅らせる農家が多い。 ・ 5月頃は高温により育苗に失敗し、購入苗で対応している農業者もある。 ・ 【夏ねぎ】 ・ 収穫終盤となっている。梅雨明けが早く、高温・干ばつの影響で生育停滞と、土寄せの遅れから出荷開始を遅らせる農家が多い。 ・ 8月以降の高温と降雨により白絹病、萎凋病、軟腐病による欠株が発生している。また、アザミウマ類、ヨトウムシ類、一部でシロイチモジヨトウの発生が多くなっている。 ・ 【秋冬ねぎ】 ・ 高温・干ばつの影響で、外葉枯れ、葉先枯れ等の発生、盆以降の降雨により、軟腐病、白絹病の発生が見られる。また、アザミウマ類、ヨトウムシ類の発生、一部でシロイチモジヨトウの多発が見られる。その他、除草作業の遅れにより、雑草が繁殖したほ場が多い。	・ 【春ねぎ】 ・ 黒腐菌核病の防除（苗かん注処理、ほ場の薬剤散布）を徹底する。そのほか、さび病、小菌核腐敗病の防除を徹底する。 ・ 5月頃は10月上旬頃までに定植される見込み。 ・ 【夏ねぎ】 ・ 10月上旬から順次播種が始まる（トンネル作型、無トンネル作型）。 ・ 【秋冬ねぎ】 ・ 9月以降も高温が続いているため、高温期の追肥・土寄せは避けるよう呼びかける。 ・ 降雨後の軟腐病の予防防除の他、鱗翅目の防除を徹底する。 ・ 台風、排水対策の徹底を図る。
			・ ＜琴浦＞ ・ 定植は、計画どおり進んでいる。 ・ 雑草や山側のほ場では害虫（ヨトウ類、コオロギなど）の被害が散見される。 ・ ＜大山＞ ・ 定植作業は、順調に進んでいる。定植後の生育はやや軟弱な傾向である。 ・ 病害は、育苗ハウス内で黒すす病の発生が目立つ。害虫はハイマダラノメイガが多発した圃場が確認されたが、他の鱗翅目の被害は平年並み。	・ 黒すす病、ヨトウムシ類の発生増加が懸念されるため予防防除を呼びかける。 ・ 一部で甚発生したハイマダラノメイガの被害は防除とともに減少する見込み。 ・ 育苗中のものは、9月中旬以降は曇雨天の影響で軟弱徒長が懸念されるため、育苗ハウスの遮光ネットの除去を呼びかける。
			・ ＜福部＞ ・ 植付は、高温・干ばつの影響で昨年より遅く7月17日頃から始まった。進捗は、昨年とほぼ同様で進んでおり7～8割終了。 ・ 植付の早いものは8月下旬頃から出芽が始まったが、高温・干ばつの影響で平年よりやや遅く、昨年とほぼ同程度の生育となっている。 ・ ＜北栄＞ ・ 植付は、大栄地区はほぼ終了、北条地区は約6割終了。昨年同様に植付時期が高温であったため、大半の生産者が植付時期を1～2週間遅らせた。 ・ 出芽は、盆前にまとまった降雨があったことから概ね順調である。	・ 福部では植付は9月下旬頃まで続く予定。 ・ 出芽後のハモグリバエの防除を徹底する。
			・ 昨年同様、高温期の着果が悪い傾向。6月中～下旬定植のものは中段までの収穫が終わり、昨年と同程度の出荷量となる見込み。 ・ 気温が徐々に下がりが始め、果実の高温障害（軟果、グリーンバック果）の発生は減少傾向。 ・ 9月以降、トマトキバガ、コナジラミ、トマトサビダコの発生が増加傾向にある。	・ 気温を確認しながら遮光ネットの除去を行う。 ・ 病害虫防除を徹底する。
			・ 高温の影響で7～8段目の花房の花落ちが発生し、着果不良が多発している。 ・ 病害は一部で青枯病、うどんこ病、すすかび病の発生が見られる。 ・ 害虫はコナジラミ類、オオタノコガの発生が多く、一部のほ場でトマトキバガが多発している。 ・ 8月下旬以降の販売単価は昨年同時期よりも高く、販売額は昨年よりも早く1億円を達成した。	・ 引き続き高温が予想されるため、例年より7～10日程度遅い9月中旬までの摘心を周知している。 ・ 摘心後は裂果や軟果が発生を抑制するためにかん水を徐々に減らす管理と病害虫防除の徹底を呼びかける。 ・ トマトキバガに対して再度注意喚起を呼びかける。
			・ 8月17日から順次播種開始され、9月15日頃で概ね終了。 ・ 高温の影響で発芽は一週間程度の遅れが見られる。	・ 順次間引きと追肥、病害虫防除を行う。
			・ 9月11日試験堀り結果 ・ 【長芋】 ・ 芋長75.0cm（平年比96％）、芋重875.3g（同92％） ・ 平年より芋長はやや短く、芋重もやや軽い。 ・ 地上部の葉色が徐々に落ち始めている。 ・ 【ねばりっこ】 ・ 芋長69.7cm（平年比102％）、芋重958.9g（同112％） ・ 芋長は平年と同等で、芋重は重かった。 ・ 地上部は一部を除いて葉色の落ちは見られない。	・ 最終防除はほぼ終了。 ・ 9月18日からク調査の結果をもとに茎葉除去の時期を決定する。
			・ 夏芽の収穫中。ハウス栽培は高温の影響で品質低下している。 ・ 雨よけ・露地栽培の収穫量は盆以降平年並みに回復しつつある。 ・ シロイチモジヨトウの発生が例年より多く、一部でハダニが多発している。 ・ 斑点病や褐斑病の発生が散見しはじめている。	・ 高温が続く害虫の発生が多いため、病害と合わせて防除を徹底する。
花き	シンテッポウユリ		・ 【ハウス抑制作型（中部）】 ・ 平均抽台率は例年より低く、9月上旬で45％程度（昨年60％）。早い圃場では9月中旬から収穫開始の見込みだが、1～2輪が中心。 ・ 病害虫の発生はなく生育は順調である。	・ 抽台率が5割を超えている生産者は寒冷紗の除去と電照を開始する。 ・ 適宜追肥、防除を行う。
			・ ＜中部地区＞ ・ 7月25日から開始した播種も9月中旬で9割以上終了。順次、八重鑑別が行われている。 ・ 8月上旬までに播種したものは、背丈15～20cm程度で生育中。 ・ ハイマダラノメイガの発生が見られるほか、炭疽病が散見される。 ・ ＜西部地区＞ ・ 中山間地のスタンダード系では、7月20日播種分は9月8日に花芽分化が確認された（前年は7月26日播種で9月9日花芽分化）。また、花芽分化時点で葉枚数60枚前後であった。また、8月1日播種分は未分化。 ・ 大山地区では7月22日から播種が開始され、現時点の展開、未展開葉の合計の葉枚数は42枚程度、花芽分化はしていない。播種時期の早いものは、高温で生育がやや遅れている以外、概ね良好である。	・ ＜共通＞ ・ 播種の早いものから準備寒冷紗を除去する。8月10日以降の播種分については、気象状況を見ながら寒冷紗を除去する。 ・ ハイマダラノメイガ、コナガ等チョウ目の防除を徹底する。 ・ ＜中部地区＞ ・ 高温で花芽分化の遅れが予想されることから、7月下旬～8月上旬播種分は開花促進のための電照を平年より1週間程度早めに開始する。（例：7月25日播種分は9月9日頃から電照開始） ・ ＜西部地区＞ ・ 中山間地の7/20播種分は10月上旬に収穫予定（県内初出荷見込み）。
			・ 6月下旬播種分は着蕾している。また、7月播種分も概ね順調に生育している。草丈40～50cm程度。 ・ チップバーンは一部品種で多発傾向だったが、例年より発生が少ない様子。	・ 6月下旬以降の播種分については、9月下旬の収穫調整を予定している。 ・ 2期作については11月に収穫予定。
飼料	飼料用トウモロコシ		・ 6月上旬までに播種したトウモロコシについては、収穫調整作業が順調に終了した。一部ほ場でイノシシや虫害が見られたが収量は平年並みの予想。 ・ 2期作トウモロコシについては、順調に生育しているが、一部ほ場でヨトウムシの食害が発生した。	

【農作業安全について】
秋の農作業安全運動期間中（9/1～10/31）。スローガンは、急がず・焦らず・怠らずで、生産第一よりも安全第一の農作業。